

## 生殖医療と家族援助

### ～子どもの性の“揺らぎ”と“気づき”～

荒木晃子

#### 振り返り

毎回、次号の執筆前には前号を読み直し、文章を続けるだけでなく、いま一度頭のなかを整理し、前号から気持ちをつなぐ作業を繰り返すことを心がけている。今回もしかし、前号を読み返し、大切な、「ひとは皆、この世に生まれ、誰かの手によって育まれる。成長過程、特に幼少期に於いては、人間はひとりで生き伸びることはできない」という基本概念を失念して記述していたことに気付いた。

前回(第43号)では、戸籍の性別の決定、それを強化する教育、性自認、好きになる性の方向など、生まれて以降、成長と共に性が可視化されることについて述べた。今号では、子どもの成長を見守り、その時々に関わり添い育む養育者の視点で、子どもの性の発達を再検証したい。

#### 自分の性に“気付く”ということ

セクシュアルマイノリティ当事者であってもなくても、自身の性について自認、違和、方向性(異性に向かう、同性に向かう、異性と同性に向かう、誰にも向かない)などの気づきや自覚は、個人差はあるものの、一定の年齢に達するまでその確信を持つことが難しい。時として、成長過程で性に関する知識や情報に触発・誘発され、戸惑い、疑い、迷い、悩むこともあるだろう。しかし、いずれの体験も、それが“自身の性に気付く”契機となる可能

性はあっても、必ずしも自覚につながるとは限らない。外部から入ってくる性に関する知識や情報は、自分以外の誰かのものであり、良くも悪くも子どもが受ける影響の一部分でしかありえないのだ。

では、自身の性に関する自覚はどのように形成されるのだろうか。一考してみよう。

幼少期以降、青年期までにセクシュアルマイノリティ当事者が経験する様々な違和感、或いは子どもの育成に関わる、養育者を含む養育環境から受容する情報が一因となることが多いという。子どもの生育過程に於いては、育つ環境がその時期、子どもにとっての“社会の全て”であるため、その養育環境にある知識や情報、それを伝える人々が、情報源となり子どもに及ぼす影響力を持つためである。近年、幼稚園に入る前の幼児に、家庭で性教育を始めることが推奨されつつあるのも、その一例である。自分のプライベートパーツ、他者との境界線など、性の自覚を持たない子どもの性被害を防ごうと、小児科医、精神科医、教育者と共に養育者である(主に母)親たちが、その必要性を認識した学習機会となっている。

子どもは、環境から受容した知識や情報をもとに、自分は男の子・女の子、或いはお兄ちゃん・お姉ちゃん、さらには、「この人が自分のお父さん・お母さん」と認識する。彼らは

空腹を満たし、愛情を注ぎ、必要な時には心と体を丸ごと抱きしめてくれる人たちである（はずだ）。彼らの育みのなかで、小さな命は成長し、自我が目覚め、やがて家族の一員となるにつれ、信頼し身をゆだねることができる特別な人たちと認識する。血縁による繋がりだけが「家族」ではない。家族は、家族になろうとする人たちと日々かかわり、共に暮らす中で、つくられていくのである。

家族の意味もわからない幼少期には、常に自分を守り、育ててくれる人たちとの生活の場が自分の居場所であり、その空間で共に暮らすコミュニティの関係を、「家族」と呼ぶことを学ぶ。子どもの成長・発達過程で経験する、家族との安定的な関係性の中で、自他を識別し、他者との関係性を学び、やがて「自分とは何者か」を確信する力が育つのであろう。子どもにとって、家族は、人生で最初の学びの場でもある。

## 肯定感

幼少期、子どもの衣食住の全ては養育環境、家庭では主に親、保育園では保育士などの養育者から提供される。男児には、男の子の服を着せ、男の子らしい立ち居振る舞い、用の足し方を教え、将来のために男の子にふさわしい躰を心がけるかもしれない。養育者の言動を疑うことを知らない時期、子どもはどんなことでも言われたことは守ろうとするだろう。言いつけを守るというより、言われたとおりに“その人を真似て”やってみようとする、が表現としてはふさわしいかもしれない。例え、すぐにはできなくても、言われたとおりにやろうと努力するはずだ。ほめて欲しい、認めて欲しい、嫌われたくないといった、承認欲求からくる行動である。生まれてから

数年間は、公的、継続的に子どもの知能、情緒、視聴覚、空間認識など様々な発達検査を行い、子どもが成長し発達を遂げているかを科学的に確認する制度がある。同時期、子どもは家庭で、衣食住に必要な行動様式を養育者から学ぶこともあるだろう。日々繰り返す日常の営みの中で、子どもは養育者を含む家族への信頼感を獲得し、徐々に自己肯定感が芽生えていく。

自己肯定感とは、自分は愛され、守られており、ここで安全に暮らすことができる。いわば、“自分は生きていて良い存在なのだ”と、己を肯定的に受容する感覚/受容する力といえよう。子どもが成長し、人格が形成される過程で、自己肯定感是个の人格の中核を成す重要な発達課題の一つとなる。幼少期の養育者との安定的な信頼関係から、自己肯定感の基盤が形成されることで、“自分らしく生きる”ことができるようになるのである。

## 違和感

「ボクは男の子だよ」。  
ある日、幼い我が娘（こ）にそう告げられたら、親として“あなた”はどう応えるだろう。もし、あなたが保育士ならば、どんな表情で、なんと声をかけるだろうか。

養育者の言動は、子どもに与える影響が大きい。その前提で応答するのであれば、「それは間違っている」、「そんなことを言うてはいけない」、「なんてことを言うの!」との返答は正しいとは言えない。ましてや、「この子、どこか“おかしい”のではないかしら?」、「大変だ。病院に連れて行こう」などと考えるのは、論外である。

養育者が、子どもの性に関する言動に違和感を覚えたときは、まず否定しないことが大切

である。初めに、「そう、男の子なのね」と肯定的に返答する。その後、時間をかけ、日常生活の中で、なぜそう思うの、どうしてそう思ったの、いつから思っていたのなど、スキンシップやコミュニケーションをとりつつ、時間をかけ、やさしく尋ねることを心がけたい。その際、立て続けに質問攻めにして、子どもを追い詰めてしまうことには注意が必要である。

性に関する違和を言葉にする子どもは戸惑っている。女の子として生活し、女の子として接する家族に対して、「ボクは男の子だよ」と伝えることが大切だと思っている。信頼できる家族だから、きっと何を言っても大丈夫だと信じているから、伝えようと思うのである。もしかすると、子どもごころに、自分の中に生じた“違和感”を知ってほしい、或いは、自分は間違っていないか確かめたいと思い、伝えるのかもしれない。例え、それがどのような理由であっても、否定することだけは避けなければならない。そのことが、性に関する違和感を持つ子どもの“その後の人生”を、大きく左右することにつながる可能性が否定できないからだ。その子が“自分の性に違和感を持っていること”を疑わないことが重要である。結果として、違和感があるのかないのかではなく、その子は間違いなく「性に関する違和感を感じている」と“思っている”。実際を確認する前に、子どもの思いを疑うことだけは避けなくてはならない。

## 憤る

筆者がLGBTQ当事者のカウンセリングやコンサルテーションに対応する際、必ずと言っていいほど聴く語りがある。

ある当事者は言った。「自分の悩み・苦しみは、これまでに経験した様々な傷つき体験

78が元になっている。それらは全て自分のセクシュアリティが原因なんです」。

確かに、セクシュアルマイノリティ当事者は、誰一人として“傷ついた体験を持たない者”はいない。また、当事者の大半は、傷ついたのは、“自分に原因があるから”と思っている。果たしてそうなのであろうか。“自分に原因があるから傷ついた”との語りを、にわかには信じられなかった。私が出会った当事者たちはみな、法に触れることは何もしておらず、誰も傷つけてはいなかった。ただ真剣に、自分らしく生きたいと願いつつ、その願いがかなわない人々であった。では、なぜ、自分のせいで親を苦しめた、自分のせいで家族が悲しい思いをした、と語るのだろうか。彼らに、そう語らせるものは何であらうか。確かに、彼らの人格の基盤を揺るがす“何か”があるのは間違いない。それは、彼らの内面だけでなく、彼らの家族と、我々が暮らす社会に潜在していることを確信している。